

編集後記

『国文学試論』第二十八号をお届け致します。「平成」の元号も、三十年を数え、新元号の発表を控えている今日、「時代」の節目にあることを感じています。本誌も、第一号が昭和四十九年に刊行され、四十五年の月日が流れました。『国文学試論』は、大正大学大学院国文学研究室に所属する院生の研究発表の場として、多くの先生・先輩方の手によって、育てられ、また守られてきたものです。伝統ある本誌を今年も刊行できたことに、この場を借りて感謝申しあげます。

今回は、古典四本、近代一本、合計五本の研究論文が掲載されています。現在、国文学研究室には、修士課程二名、博士後期課程六名、合計八名の院生が在籍し、研究分野は、上代から近現代まで多岐にわたり、充実した研究生活を送っています。「スピード」が求められる現代に、腰を据えてじっくり学ぶことのできるこの有り難さを噛み締める日々でもあります。大正大学の銀杏並木の脇には「伝導掲示板」があります。ある時、太宰治のつぎの言葉が書かれていました。

「人の辛さに敏感な人が本物の教養人である」
日々の学びにおいて、自分自身を見つめるなかで、心に深く突き刺さる言葉でした。どんなに時が流れても、人間の心の機微に優しく寄り添うのは、人情であり、言葉なのではないでしょうか。

最後になりますが、今号の刊行に際して、熱心にご指導くださいました先生方、ご支援くださいました大学職員の方々、色々とご無理を叶えてくださいました印刷会社のみなさまに御礼申し上げます。今年度をもちましてご退職なさる、大場朗先生、藤原克己先生には懇切丁寧なご指導を賜り、助手の中村花緒氏には、細やかなご支援をいただきました。ここに感謝の意を記して、重ねて御礼を申し上げます。
(平間)

国文学試論〈第二十八号〉

二〇一九年三月七日 印刷

二〇一九年三月十三日 発行

編集兼 東京都豊島区西巢鴨三―二〇―一

発行所 大正大学大学院文学研究科

国文学研究室内

印刷所 東京都豊島区東池袋五―四九―六

株式会社 白峰社

電話 〇三(三九八三)二三一二番